

# 松之一色

花伝書を見る

松の一色（松の一色真：初版）

桑原治郎兵衛（富春軒：初版）

松 苔

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



# 桑原治郎兵衛

立花時勢粧「松一色」

この絵図は木版刷りに彩色されている。墨色だけの絵と比べてみると、苔生した枝や赤茶けた松葉の微妙な味わいが絶妙に彩色されているのがわかる。

想像だが、富春軒仙溪が絵を描き、彫り師、摺師すしによって木版刷りができた時点で、絵師もしくは富春軒本人によって念入りに彩色が施された

のだろう。

流祖の息吹を感じてもらいたくて、原寸大で掲載させていただいた。

3月に立花時勢粧333年・桑原専慶流いけばな展を予定している。タイトルは「花の芸術」。代々の家元が大切にしてきた「花を敬う心」で皆さんと共に花をいける日を楽しみにしている。

仙溪

花伝書を見る

立花 檜除真

「松の前置」富春軒

檜 晒木 沢水木 水仙

松 苔 枇杷 榿木

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「松の前置」

水際の松と中央の晒木  
がつくる深山幽谷の景色。  
水仙は仙人のようである。  
檜の曲線と沢水木の直線  
が絶妙。苔生した小枝が  
効いている。 仙溪

富春軒

# 櫻之一色

花伝書を見る

立花 桜の一色

(初版では富春軒)

桜 苔木 万年青 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「桜の一色」

まるで1本の桜の大樹である。桜花の間に若葉が覗いている。山桜である。

桜は諸花の頭であり、桜を尊美す心をもって立てるためには、花の咲くことのない草木をあしらひだけに用いるようにし、あくまでも桜が主役となるような配慮をもとめている。

桜には晒木は使わず苔木を添えていることも自然を手本にした表れである。自然の美しさを敬う心を強く感じる。

桜一色は3図あり、この絵が最初に登場する。初版では作者は「富春軒」で題は「桜一色真」となっている。

後刷本では作者名と「真」が削られている。

立花時勢粧333年「花の芸術」展では桜一色に挑む予定だ。すでに本桜という品種の大枝を切って開花調整してくれている。私にとつて初めて桜一色を楽しみにしている。

仙溪

花伝書を見る

立花 藤除真

「藤の心」一歩子 (富春軒・初版)

藤 松 檉 躑躅 柘植

小菊 鳶尾 若葉

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



立花時勢粧「藤の真」

S時に上へ伸びる藤蔓を真にした立花。「秘曲の図」の一つで、元は富春軒の作である。若々しい蔓の姿に藤の命を感じる。2色の躑躅で明るく彩りを増している。

仙溪

一歩子

# 草花

## 花伝書を見る

立花 芦除真

「草花」僧光清（富春軒・初版）

あし 薄 すすぎ 百合 しやくやく 芍薬 かまつぼた 杜若 小菊

熊笹 紫苑 くまざさ 紫苑 むらさき 著我

（立花時勢粧・下 秘曲の図）



草花主体の立花である。葉を広げ茎を伸ばし花を咲かせる草花たち。自然の息吹を見つめる眼差しを感じる。

花をいけるのは、和歌や俳句や詩に自然の輝きを詠みこむのに似

ている。肝心なのは輝きを感じる心。富春軒のいける花はどの花もキラキラ輝いている。

仙溪

# 僧光清

# 草花砂之物草

花伝書を見る

砂の物 檜扇除真

「草花砂之物草」

中野氏（富春軒・初版）

檜扇 芦 杜若 仙翁花 百合

擬宝珠 小菊 桔梗

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

立花時勢粧の百十八ある絵図の一番最後、トリを飾る一作。見開きで掲載されているので、生き生きとした躍動感を感じ取ることができる。

この絵図の主役は草花で、植物の澆刺とした生命力を表現しようとした富春軒仙溪の心が読みとれる。

右へ大きく弧を描きながら伸びる葉は何の葉だろう。ススキのようにも見えるが、葉の下にやはり長く伸びた茎の先にカキツバタの蕾が描かれていることからすると、この長い

葉もカキツバタの葉ではないだろうか。

池のほとりで雨風に倒れたカキツバタの花と葉が、思いのほか長く伸びていて、それをなんとか生かしたい一心でこの砂の物を立てたのだろう。厳しい環境にあらがう植物の姿を美しいと感じ、魅了されていたのだと思う。

「二瓶の内に一枝風流なれば、ほかこれにあらそいて働きあり。」と「砂の物草の花形」で述べている。

普通は上に伸びる葉が水面を飛び越えんばかりに横へ伸びる。その姿にヒオウギやユリが絶妙なバランスで配されている。左下に横倒しに育ったユリがガイッと上を向いている。よくこんな咲き方を見つけてきたものと感心する。砂鉢の装飾までが渾然一体となっている。 仙溪



中野氏

# 荷葉一色

花伝書を見る

立花 荷葉(蓮) 一色

桑原次郎兵衛

蓮

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

28本の花・実・葉・巻葉が渾然一体となっている。この立花を立てた桑原次郎兵衛は初版において富春軒36作に次ぐ16作の絵図がある。富春軒が自然の面白みに寄り添う感じな

のに対して、次郎兵衛は自然の造形の組みあわせを楽しんでいる感じがする。自然体の富春軒と攻めの次郎兵衛。二人はどんな関係なのだろう。



桑原次郎兵衛

# 同花形之内流枝持立

花伝書を見る

立花 りつが 松除真 のまじん

行の花形 ぎよう 流枝持立 ながしもちたて

富春軒

松 苔 百合 仙翁花 せんおうが

著我 しやが 木槿 むくげ 柘植 つげ 嫩葉 わかば

小羊齒 せうじ 桔梗 ききよう

(立花時勢粧・上)

目を引くのは低い出口から

立ち昇る真と長く横へ伸びる

流枝だが、真や流枝に添う百

合もかなり長く見せている。

ひよつとすると、百合を伸び

やかに見せたくてこの花形が

生まれたのかもしれない。

全体を見ると頭をもたげた  
龍のように見える。百合の花  
は開かれた龍の手、器は龍が  
守る玉。漲る生命力を感じる  
不思議な立花である。



富春軒

# 同砂之物

花伝書を見る

菊一色 砂の物

専定寺 (富春軒・初版)

菊 小菊

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

「砂の物」にも真行草がある。二株立てで、男株と女株に軽重がないように立て、どちらにも正真と前置があるものを「行の砂の物」という。

この図「菊一色砂の物」は男株と女株の軽重が自由で、二株であっても正真一つ、前置一つなので「草の砂の物」である。

「株立は異曲風流に意気はづみを第一として立てるが、とりわけ草の砂の物では、一手珍しき作意がなければ叶わない。」と富春軒は書いている。

向かって左の株から真の菊が右側に除いて出ている。普通なら左に除いて出るところ

を逆にすることで意外性を生んでいる。「珍しき作意」である。

挿花の神髓を習得した上で、定石にこだわらない自由な精神が備わってこそ「一手珍しき作意」は生まれる。



専定寺

# 同

## 花伝書を見る

立花 りっか 梅擬除真 うめごしじん  
除心の内草の花形 のきしん

富春軒

梅擬 うめごし 枇杷 びわ 菊 きく 小菊 せうきく

熊笹 くまざさ 伊吹 いぶき 嫩葉 なは 檉木 かたき

(立花時勢粧・上)

固定観念を払拭するかの  
ように、ビワの葉3枚だけ

でさらりと胴をつくり、ウ  
メドキの軽やかさに対応  
させている。更にクマザサ  
の茂みが呼応する。  
花材の選択と工夫の妙味。



富春軒

# 直心立之内草之花形

花伝書を見る

立花 りつか けいとうすくし 鶏頭直真 すくしんたて

直心立の内草の花形

桑原正栄

(富春軒仙溪・初版)

鶏頭 柳 梅擬 菊

擬宝珠 檉木 檜扇

躑躅 伊吹

(立花時勢粧・上)

うに目のある所に目あり、鼻ある所に鼻があるように」との古人の言葉を用いている。

型の中でどれだ

け草木の個性を引

き出せるかが問わ

れる花形である。

松以外を真(心)にした直真立花は「直真立・草の花形」になる。「直真立草の花形」というのは、心に梅、海棠、梅擬、水木、檜、鶏頭などの直なるを用いる」と書かれている。

直真立ては法度を守り格式に背かず、草木きれいに素直なもの丈高く幽玄にさすことを本意とする。「人の顔のよ



同

花伝書を見る

立花 りっか 松除真 まつのおきしん

「南天の胴」

富春軒

松 若松 伊吹 晒木 南天

栢植 つげ 小柏 小菊 著莪 しよが

(立花時勢粧・下)

中段の南天を境に、上段と下段の景色が違う。上段の色が抑えられているので、赤い実が際立って見える。



上段右上へ立ち昇るのは松の若木だろうか。だとすれば、老松の間に伸びる若い松の初々しさが加わることで、南天の赤い実りが益々映えてくる。

富春軒

# 松竹梅

花伝書を見る

立花 りつか 松除真 まつりきしん

「松竹梅」

富春軒

老松 若松

竹 枯竹 熊笹

紅梅 白梅 苔梅

(立花時勢粧・下)

古来より祝言の花として松、竹、梅を真にした三瓶を並べ

ることがあり、また松竹梅を一瓶に立てることもされたが、他の草木をまじえず松竹梅だけで立てることは古人も指しもらした花形で、真の松竹梅と呼ぶべきか、と書いている。

松竹梅それぞれに老若の対比があり、変化のある竹と共に力強い生命を感じる。若松の真の勢いに、未来への願いが託されている。



富春軒

# 除心立之内真之花秋

花伝書を見る

立花 りつか 木蓮除真 もくれんのきしん

除真の内真の花形

富春軒

木蓮 もくれん 伊吹 いぶき 松 まつ 栢植 つげ

躑躅 つづじ 小菊 こぎく 檉木 かえぎ 枇杷 かき

著我 しやが 要 かなめ

(立花時勢粧・上)

花形ばかりになってしまったと富春軒は嘆いている。

昔の名人はあえて扱い難しい(の枝)を探し、工夫をこらすことで色々な花形を生み出した。それらは除真のうちの花形と言ひ、花に自由を得て様々に景色を変え、人の

この立花図には「近ごろ出された花伝書に多く載る花形」で「これ私の作意にはあらず」と添えられている。

除真のうち真の花形は仏前対の花に必ず用いる花形なので出し所や寸法に定めがある。そのため人に立花を教える最初の花形となったが、それゆえに今では立花といえばこの

心を慰めたと書いている。

この木蓮の立花は充分に美しいが、立花の醍醐味はまだまだこの先にあるのだよと富春軒は伝えたかったのだろう。



富春軒

# 同砂之物

花伝書を見る

砂の物 桜一色

(富春軒・初版)

桜 万年青 伊吹 柘植

苔木 檜 羊歯

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

男株と女株のバランスに軽重がなく、どちらの株にも正真と前置があるので行の砂の物である。苔生した太い幹が両株の土台となって、躍動する桜の枝をしっかりと支えている。

絵は平面だが実際は立体である。それぞれの枝の出方を思い描いてみよう。

左側、男株の苔幹はかなり大きそうだ。三方に分かれた一本の幹が前方へ傾いて出ているのだろう。直上する幹は、前から後ろへ曲がり、やや後方で立ち昇る見越の役割、その左の幹はぐいっと前方へ力

強く出ているように見える。荒々しい男株の苔幹に対して女株では株の中心に真っ直ぐ立っている。静と動の対比が面白い。

太い苔幹から別れ出た苔枝はどんなふうに出ているのだろう。男株では前に出た太い幹から左やや前方へ。女株では直立した太い幹から右やや後方へ出ていると見た。

桜の枝の立体感も想像してみよう。男株で立ち昇る真は太い苔幹に添うように一度左前方へ出てから器の真上へ戻る丸みのある形。その左後方に副が、さらに左後方へ控枝が伸びる。正真の桜は株の中心に直立している。

女株の請は立派な横枝だ。真横へ。この後方の請と前方最初は右後ろへ出てやがて真横へ伸びる感じか。低く右下に伸びた流枝は株の後方から横へ、途中から前へ、最後は葉にも風を感じる。

立花時勢粧の絵図は、実際に立てられたものが描かれている。その場に自分が居て見ているところを想像してみよう。

季節毎に花会を催して絵にしたとあるが、3作の桜一色は同じ時に立てたものか。立てた時は蕾だったのか。どんな場所で立てたのか。多くの人が見ただろうか。



花伝書を見る

檜のきしん除真

富春軒

檜ひのきしやくやく芍薬

松かなめ

要 小菊

晒木 (苔木)

(立花時勢粧・中 雑体の図)

ヒノキが主材ではあるが、シャクヤクも主役に見える。軽やかに昇る真と、左下から大きく跳ね上がる流枝、それらを繋ぐ胴のヒノキがシャクヤクのために舞台を作っているかのようだ。後方のマツが舞台の格を高め、中央でシャクヤクが舞を舞う。そんな想像をしていると、立花全体が一人の舞人にも見えてきた。神楽舞かぐらまいのイメージだ。格調高く舞う姿に神が宿る。



富春軒

花伝書を見る

二株砂物 太蘭真  
富春軒

若による水辺の景色を見せる。  
山に分け入り、太蘭の生える  
神秘的な沼にたどり着いた、

太蘭ふとらん 芍薬しやくやく 松しょう 晒木せうぼく  
杜若かまつばた 小菊せうきく 檜扇ひのうき 嫩葉わかば  
(立花時勢粧・中 雑体の図)

富春軒が目指した「自由」  
がここにも現れている。真つ  
直ぐ育つ太蘭が曲がりつつ放  
つ生命力に心打たれたのだら  
う。数本の太蘭なのだが、松  
の株や晒木と対等にいやそれ  
以上の存在感がある。  
それぞれの配置の絶妙なこ  
と。松の切株や晒木を近景に  
して、その向こうに太蘭と杜

そんな想像をしながら眺めて  
いる。  
砂の物は株立かぶぞとも呼ばれる  
ように基本的に太い株が景色  
に加わる。立花とはまた別の  
表現ができるし、そこを目指  
さねばならない。



富春軒

花伝書を見る

杜若一色 除真

桑原次郎兵衛

回

杜若 かきつばた 河骨 こうぼね  
(立花時勢粧・下 秘曲の図)



手が逆さまに付いた不思議な形の器によって、水辺の花の妖艶さが増して見える。桑原次郎兵衛は才氣溢れる技量の持ち主だと思う。この器も自分でデザインしたのではないだろうか。2色の花色に陰と陽が巧みに表現されている。

桑原次郎兵衛

同

花伝書を見る

荷葉(蓮)一色 (行:初版)

富春軒

蓮 芦 小菊

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



蓮池の畔に芦や小菊が生えている、そんな情景が目に浮かぶ。破れた蓮の葉が、芦の勢いを際立たせている。それぞれどの方向へ出ているのか。立体を想像していると時を忘れる。流祖の時代へのタイムトラベル。

富春軒

# 同砂之物

花伝書を見る

荷葉(蓮)一色 (砂の物・

初版)

寸松軒 (初版・富春軒)

蓮蒲

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

横に広い口をもつ砂鉢に立てる「砂物」は、おのずと横広がりとなる。この蓮一色砂の物も、まるで目の前に蓮池が広がっているようだ。

男株と女株に軽重がなく、一株の砂物を左右に分け広げられたように立てられている。両株の正真、胴、前置の景色を変えることで、自然な景色の繋がりを見せている。

2つの株を1つに合わせた姿を想像してみたい。正真から前置にかけての景色に何の不自然さも感じない。

脇役的な存在だが、両株の間の後方に見える巻葉が、この砂の物の要のように感じる。



寸松軒

花伝書を見る

菊の一色（行：初版）

富春軒

菊 小菊

（立花時勢粧・下 秘曲の図）

がもともと備わっているから  
だろう。風に倒れてもそこか  
ら立ち上がる姿。土の中にしっ  
かり根を張って風に立ち向か  
う姿。そういうクセのある姿

を絶妙なバランスで各所に  
配置し、しかも全体が自然  
な味わいを損なわない。ど  
の一色物も、命の輝きにあ  
ふれている。

一色物には独特の雰囲気がある。過去に見た景色と重なる感じ。他の立花と比べて、より自然な印象を強く受ける。富春軒の一色物は正にそこに生えているようで、人の手を感じさせない。

そう感じるのは何故だろう。おそらくどの花にも強い個性



富春軒

# 同砂之物

## 花伝書を見る

紅葉一色 砂の物

(富春軒・初版)

楓かえでしやれぼ 晒木いぶき 伊吹いぶき 柘植つげ

苔株こひな

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

画面の右下、屈曲しながら力強く晒木がのびる。おそろく伊吹(柏榎)が風雨に晒されたものだろう。厳しい環境を感じさせる。

その晒木の白さが楓の赤い葉を際立たせている。

さりげなく存在感を発しているのが苔生した株である。彩色の具合にもよるが、この絵図の場合は切り株というよりも、苔生した岩のようにも見え、とても瑞々しい。苔は楓を育てる水を蓄えているかのようなだ。

乾いた晒木と、苔に覆われた株の対照が、色づく楓の命の美しさを強めている。



花伝書を見る

松一色 (行・初版)

富春軒

松 苔 松毬

(立花時勢粧・下 秘曲の図)

この図だけ「富春軒」の名前が草書体になっているのは何故だろう。

富春軒が問いかけてくる。「君は自然と一体になれたかい?」

山深く人跡未踏の仙境を行者の如くに分け入ってはじめて出逢えるような景色とでも

言えがいいのだろうか。岩の隙間に根を張って風雨に堪える松の姿。どれも並の松ではない。様々な個性が混沌とし



富春軒

# 水仙一色

花伝書を見る

水仙一色 (真・初版)

富春軒

水仙 金盞花 著我

(立花時勢粧・下 秘曲の図)



自由奔放な水仙の姿。これらは葉に針金を通して形作つたものではなく、すべて元々の姿であり、自然に曲がりくねった水仙を集め、役枝に配することで絶妙な花形を生み出している。

どの水仙も行儀の悪い扱いがたい姿をしているが、それ

は雪に倒れ風に翻弄されても葉を伸ばそうとする命の姿であり、富春軒はそういうものに自然本来の力と美を見いだしている。まさに

「花は野にあるように」挿している。

富春軒